

ニック・ビジネスが段階的に入れ替わり、モザイク状に混在する現在の街並みが形成されていった。住宅地図分析によって、それら都市景観の変遷の様相を見ることができた。

後半では、筆者自身のフィールドノーツを提示した。これらは、大久保の街で様々な人との出会いを通じて体験したものである。この方法を用いる事によって、よりリアリティを持って本研究の

大久保という舞台で繰り広げられる活動とその内容を記述できると考え、そのまま取り上げることとした。大久保では、活動する主体によって、多様な捉え方で様々な見方がされ、そして、その見方に基づいた活動がされていた。大久保という街で、様々な「表情」を持つ主体が、協働したり相克したりしながら、活動していた。

カンボディアにおける教育協力活動の実態と課題 ——識字教育を中心として——

生野 知子

開発においては、対象国の国民自身が国の発展や自分たちの生活の向上を目指して、主体的に行動することが必要である。そのために最も重要なことの1つは、その国の未来を担う人材を育成する教育であると筆者は考えている。本論文ではそのなかでも最低限必要な能力を養成すべき識字教育に着目した。

東南アジアで識字率の低さが問題視されている国の1つがカンボディアである。それは不幸な内戦の歴史と深い関係がある。同国は世界で有数の被援助国となっているが、実際にどのような活動が行われているのか、教育分野と識字教育について現状を把握し、歴史と地域性から問題点を明らかにすることが本論文の目的である。研究方法としては文献調査に加えて、教育協力活動における4つの立場の異なる団体を対象に、現地でのフィールドワークと日本での聞き取り調査を行った。

カンボディアが内戦で失ったものは、多くの知識人、書物や建造物、また人々が伝えてきた文化にわたる。そして内戦後の人材不足が教師の質の低下という問題になっている。校舎や教材、文房具の数量も不十分である。教育の質が改善されな

ければ、人々の教育への関心は高まらない。しかし、身につく教育を受けられるのであれば、多くの入学希望者が集まるということが、教師の給料をサポートするNGOの支援によって授業を毎日行う学校の例から分かった。新たな非識字者を生まないためには、まず小学校の就学率・進学率を改善しなければならない。絵本の読み聞かせを行うNGOの活動からも、識字教育や絵本が普及すれば就学率の向上も期待できることが確認できた。

人々の心に大きな傷を遺した内戦は今もなお、地雷事故などで人々に新たな傷を負わせている。その一端をカンボディアのフィールドワークでは肌で感じた。地雷をさける教育やHIV/AIDSの予防教育など、危険から身を守るための教育がカンボディアでは必要とされている。そういった事情を汲み取るために、地域に根ざしたNGO活動と、資金と大きな単位で事業の行うことのできる国際機関や政府機関との相互補完的な協力が今後一層期待される。地域に根ざした活動とは、ローカル・スタッフ、現場で関わる人、地域住民の間の綿密なコミュニケーションの上に成り立つ活動である。

グローバル化する東京の外国人観光客 ——FIT (foreign independent tour) の受け入れをめぐる——

岩崎 雅子

今日の世界ではグローバル化が進行し、物や人の移動が促進され、その中で旅行という形態の人の移動も変化している。空間と時間の短縮

によって目的地も遠距離化し、旅行形態もパッケージツアーだけではなく個人旅行も多くなった。